

---

# ガイアの持ち主

ガイア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガイアの持ち主

### 【Nコード】

N7553Y

### 【作者名】

ガイア

### 【あらすじ】

ある平凡な中学生でありながら友達が非常に少ない少年の夢の中にだけ出てくる謎の少女  
彼女を中心に、少年の人生が大きく変わる  
学園系&アクション&恋愛(?) 小説ここに至る！

## 夢（前書き）

最初の方は文法などがめっちゃくちゃですが、後々よくなっていきますのでよろしくお願いします

## 夢

俺は今、夢を見ている。将来の夢などではなく、寝ている時などに見る夢だ。

なぜか、いつも同じ夢だ。いつも同じ長い黒髪女の人が、同じ場所に立っている。年は同じくらいだ。それからいつも夢が始まる。

だが、ここからはいつも違う。

違う服を着て、違う会話をして、違う所に向かって歩いたり、走ったりもする。この前なんか、どういう訳か競争するはめになった。

なのに、俺はその人の事は知らない……。少なくとも夢でしか会った事はない。本人も、俺とは現実では会った事ないと主張している。

まあ顔は、そこそことのっている様な気がする。

この前、友達にこの事を話してしまった。次の日、俺の家に腕の良い心理学のお医者様を連れてきて、散々な目にあった……。

その腕のいいお医者様が言うには、この女の方は、俺の『妄想』だそうだ。

だが、俺はそう思えない。だってこの人は、俺の聞いたことの無い名前を持っていた。

その名前は、水無神みなかみ 操緒みいお

誰なんだ……。マジで。

今日の朝は、腹部の激痛から始まる。

「ぐくぶ！」

これが今日の一言目だ……。

自分の、未だに痛みが走り続ける腹部を見てみると、すばらしいまでに肘が食い込んでいた。

ふっ！

と、鼻を鳴らして、天井を見上げた。

今日も無事に目覚める事が出来た。もしかしたら、未来の俺の死因は、これなんじゃないかな・・・

こんな事を考えながら天井を眺めていると、何かが天井を隠すように覆いかぶさった。

この肘の所有者でありながら、俺の死因である方・・・  
苑宮 そのみや 和 か  
葉 すは である。

「どう 起きた？」

なぜかいつも楽しそうにこう聞く。

「ああ このまま二度と目覚める事ない眠りにつきそうだ・・・」  
腹部に走る激痛に耐えながらやつとの思いで答えた。

「なら もう一丁」

はきはきした口調で答えながら、腹にめり込んだ肘をぬき、またいつでもめり込ませるぞ、と言わんばかりの体制に入る。次の動作に入る時にはきつと、俺は深い眠りついていることだろう・・・

それだけは回避しろと俺の本能が叫びまわっている、

「わ、分かった。分かったから、もうやめろ！俺もまだ長生きしたい！」

マジで叫んだ。そう、俺はまだ長生きしたいのだ。

「長生きしたいなら、さつさと着替えて、ちゃっちやと朝食を食べなさい」

満面の笑みで言わないでくれ、とてもかわいいのだが、マジで怖い・・・

## 夢（後書き）

いろいろとパクリキャラが出ている事をお許し願いたいです

いくつかネタもパツクっておりますが、主なストーリーはオリジナル品なのでよろしくお願ひします

## 朝の『普通』

現在時刻 7:30

まだ、学校に行くには早いような気がするのだが・・・  
いちいち愚痴っていたら、いつ命が狙われるか分からないのでやめておく。

俺は、1分で着替えて、2分で食事を済ませるというスキルを身につけた。これは、命の危機に陥っている時にしか発動出来ない特別な物だ。和葉は、俺を横目にテレビをのんき眺めている。おのれいつか覚えているよ、という危ない気持ちは心の深いところに締まっておこう。

2011年12月24日金曜日これが今日の日付だ。

そう、クリスマス・イブ。

世間の子ども達は、ウキウキした気持ちで学校に通学することだろう。

俺は、朝から地獄だ・・・

まず、あいつどうやって我が家に侵入したんだ・・・ 玄関の鍵は、和葉が入ってこれないように、と言う念まで込めて閉めたはずだ。どうやって入った。窓から？いや、もしそうだったら近所の方々が確認して俺の耳か、警察に言ってくれているはずだ。

煙突？いや、我が家にはない。本人に聞く？馬鹿か俺、殺されるぞ本人は鼻歌を歌いながらテレビを見ていた。

現在時刻 7:58

『目覚ましテレビ』の『今日の占い』のコーナーを見終わった後家を出た。

鍵を閉める時、鍵変えようかな・・・、と言う思いが頭をよぎった。女の子と二人で登校。

これは、全国の男達の夢であろう。

だが、今俺のやっている事はそんな生ぬるいものではない。

そこそこ、楽しい会話をしているのだが、いつ襲われるか分かったものではない。

なぜ、こんな事になったのだ。

俺は会話を続けながら、自分の人生を振り返った。

有田<sup>ありた</sup> 晴紀<sup>はるき</sup>これが俺の名前だ。通称「はる」

1996年6月2日産まれ、ふたご座

大豪東中学校（通称 東中）の今は2年4組3番もつすぐ3年だ。

和葉とは、小学校で出会った。今思えばある意味、運命の出会いだったのかもしれない。

和葉は、偶然にも家が近かつたせいで、親同士で仲良くなり、ちよこちよこ家に遊びにくるようになった。

小学5年になった頃からだ、俺を朝起こしに来るようになったのは・・・  
クラスメイトが俺を羨ましいそうにみる。お前らが思うほど好いものではないぞ、と心の中で叫んだ。

よく勘違いされやすいのだが、俺と和葉は付き合っていない。付き合えるはずがないだろ・・・

中学生になって、親同士が長期的に海外旅行をする事になった。

それから、和葉は俺の家に、自分の家のように顔を出すようになって、今に至る。

なんてついていない人生なんだ。いや、これは何か憑いている。その時おれの頭の中に、夢ででしか出て来ない少女、操緒の姿が頭によぎった。

「ねえ、ちょ 聞いているの？」

「え、 あ ああ、ちゃんと聞いている」

しまった！ ぼーっとしてた！

「そ ならいいんだけど・・・ それでね、そしたら彼いきなりビックリしてさ・・・」

そんな話をしていると、後ろの方から足音が近づいている事に気づき振り返ろうとしたら、いきなり肩に手を回されて、

「よっ！ ハ・ル」

と、俺と和葉の間で言った。もうちょっとまじな登場の仕方はなかったのか・・・

「おはよう、樋口」

答えたのは和葉だった・・・

「おはよ！ ん？ お、ハル今日も死にそんな顔してるな」

樋口がニヤニヤながら言ってきた。

こいつは樋口 琢磨たくま。俺の数少ない友達ひとの一人だ。

俺が、夢の話はなしを相談したのは、こいつだ。

「ああ 朝から死にそんな目にあつたよ」

「いいじゃねえの 女の子に朝起こしてもらうなんて贅沢ぜいたく、なかなか出来ないぞ」

樋口が楽しそうに言う

「そう ハルは私に起こしてもらっているだけで贅沢ぜいたくできてるんだから。」

「毎朝死にそんな目にあつてもか？」

「そう」

きっぱり答えた。

「それに苑宮は、結構人気あるんだぞ。俺なんか何回苑宮に告って、振られたと思ってるんだ・・・」

そう、樋口は和葉に15回告白に挑戦して、ことごとく蹴散らされているのだ・・・

「お前、まだ和葉の事好きなのか？」

「ああ そうさ俺はまだ好きなのだ」

和葉は、笑顔で答えた。

「黙れ」

16回目・・・

朝の『普通』（後書き）

出来たら感想などをよこしてもらおうとつねじいです

## 学校の主

学校の前まで着き、俺たちを待つてたのは、西川先生 通称「鉄人」  
校門の前で朝のあいさつをしている。

「鉄人」このあだ名の由来は、まずその体系だ。ムキムキのムチムチなのである。簡単に言えばゴリマッチョ！

そしてもう一つ、なぜか彼は、持つて来てはいけない物を学校に持つて来ている生徒を、一目で見抜いてしまう。

人はそれを、「鉄人スコープ」と呼ぶ。

そして、今日もまた「鉄人スコープ」の餌食なっている生徒が一人・

「ん？ 貴様これは何だ！」

そう言つて目の前にいる生徒のカバンに手をつっ込んだかと思うと、取り出しは、PSPである・・・

「げっ 嘘だ！ いつもより慎重に隠したのに！」

本当にどうやって見抜いてるんだ？あれ・・・

「うわぁー いやだ！ 生徒指導室だけはいやだぁぁぁ！」

「問答無用！ ほれ、連れて行け」

そう言つと生徒会の連中が、引きずるように連れて行つた・・・

可哀想に・・・ 長いんだよな・・・説教

俺も以前、マンガを持つて来て生徒指導室でお世話になつた事がある。

「あの生徒、1時間ぶつとうして説教なんだろうな・・・樋口」

そう言つて樋口の顔を見ると、震え上つていた。

「樋口？ どした？ まさか、お前！」

小さく、うなずき

「俺・・・エロ本持つてきた・・・」

ここにまた、「鉄人スコープ」の餌食になる人が、また一人・・・

「ハル！ 俺ヤバイよ！ これで16回目だよ！ 次やったら2時

間だって言われてんだよ」

16回目・・・これもか・・・

少しは学べよ・・・

「ハル頼む なんとかかしてくれ」

俺は小さく首を振った。

「無理だ・・・ あれを超えた奴はいない・・・」

すまない、俺の数少ない友よ！

「そうよ樋口 男らしく立ち向かいなさい」

「くっ！ そうだよな、俺には、チ コが付いてんだもんな！ よし！」

コイツいつたい、なに言ってるんだ？

「ハル あとは頼んだぞ！」

「なにをだ・・・」

そう言うと樋口は俺に背を向け・・・

「打倒鉄人！」

と言って・・・

「うおおおおおおおおお！」

・・・走っていった・・・

そして校門をくぐろうとしたその時・・・

「貴様！ これは何だ！」

そう言うと鉄人が、樋口のカバンの中に手を入れて、エロ本を取り出した。

「ぐはあ！」

何の効果音だ・・・

「おい！ こいつを連れて行け」

そう言うと生徒会の方々が現れ連行する

「チクシヨーーーオオオオオオオオオ・・・」

樋口の声が小さくなっっていく・・・

戻って来る時には、

尊敬する人、福沢諭吉 趣味、勉強

になつていなければいいのだが・・・  
なぜか和葉は楽しそうに眺めていた。  
・・・鬼だ！

結局、樋口が帰って来たのは2時間目だった。

樋口からは、生気という物が感じられない

「おい 樋口大丈夫か？」

「ん？ あ、ハルか・・・ まあな・・・」

嘘だ・・・ 2時間の説教はこれほどのものなのか・・・

「樋口！ 尊敬する人はだれだ！」

いつもだと即答で、上戸彩なのだが・・・

「・・・夏目漱石だ」

「おい 樋口戻って来い！」

そう言つて肩をゆすると、

はっ！ と、目が覚めたようなそぶりをしてキョロキョロしている

生き返つた・・・

「ハル・・・俺は何を・・・」

「樋口！」

「ハル！」

そんな事をしていると後ろから声がした、

「なに馬鹿な事してんの、もうすぐ授業始まるよ」

和葉だ・・・ 樋口にはもう気が付いているはずだ・・・

その瞬間にチャイムが鳴つた。おなじみのあのチャイムだ。

そしたら先生が来た。

俺たちは、おとなしく席に戻つた。

俺の席は、窓側の一番後ろのせきだ。そこそこいい席で気に入って

いる。

和葉の席は、俺の斜め前だ。近い・・・

樋口は、遠い・・・

授業が始まった。俺はすぐに眠りについた・・・

俺は、あそこにいた。

いつもの場所、いつもの香り。夢の中だ・・・

そして、そこには彼女もいた。

「ふーん まさかこんな時間くるとはね・・・ 予想外」

「俺はいつ寝ても、ここに来るのか？操緒」

そう操緒である・・・

「べつに今日知ったわけじゃないでしょ？」

楽しそうに答えた。

こいつは、いつも楽しそうだ。

こいつは、俺が5年生なった頃から俺の夢の中いる。

そして、俺たちと同じように成長している。

「もしかして、操緒に会いに来たの？」

「違う なんて俺がわざわざ不気味な夢の中にいる人に会いに来ないといけないんだよ」

「うわ 不気味って事は無いでしょう これは晴紀のイメージなんだから。」

イメージ・・・ こいつも俺のイメージなのか・・・

「あつ 操緒はイメージじゃないんだから」

「・・・」

俺が今言ようとしていたことだ・・・ 先を越された。

こいつは性質が悪い。ある意味和葉より性質がわるいかもしれない。

操緒は、誰よりも俺の事を知っている。

俺の見た物、聞いた事、話した事、感じた事全部を知っている。

俺のベッドの下にある『男のロマン集』の秘密をこの世界でたった一人知っている人物だ。

「なら、お前何なんだ？ 毎日人の夢の中に入ってきて」

「操緒が晴紀の夢の中に入ってるんじゃないよ、晴紀が操緒の所に来てるんだよ」

少し真面目な顔になってそう言った。

「なら、俺が幽体離脱でもしてわざわざお前所まで、プカプカ飛んで行ってるのか？」

新しい情報だ！ でも、俺が幽体離脱を本当にしてんのか？ ザ

ツチでもあるまいし・・・

そんな馬鹿な事あるわけないよな。

「うーん ちよつとだけ違う」

少し当たってるのか・・・

「なら、ここは何処なんだ？ さっきここは俺のイメージだとか、なんとか言ってる」

「うん」

あつさり答えた

「なら俺のイメージに、俺が飛んで行ってるのか」

興奮して少し早口になった

「正確に言えば、晴紀のイメージじゃなくて、晴紀のイメージの形になる所」

「意味・・・分かんない・・・」

なにがなんだか、さっぱり分からなくなってきたよ。

俺のイメージになる所？ 今のこれは、今の俺のイメージじゃないって事？

じゃ、ここは何処なんだ？ 迷子なのか俺？

そんな俺を、楽しそうに眺める操緒。

俺を騙した？ と言う事は考えられるが、操緒はこれまで俺に嘘を

ついた事がない。だから多分これも本当なんだろう・・・

「操緒も黙って見てないで、何か教えるよ」

「これ以上は、晴紀も知らない方が良いでしょう。これからの人生もつとめちやくちやになるから・・・」

おい、いきなり怖いこと言うなよ。しかも、満面の笑顔で・・・  
女の子の笑顔は怖い物なのか？

それに、『もつと』って何だ？ これまでの人生もめちやくちやだったね、みたいな言い方やめろよ・・・

それなりに、充実した人生を送って来てるんだ・・・多分・・・

「あつ そろそろ時間みたいだね」  
といって上をも見上げた。

『そろそろ起こした方が良くないんじゃねいか？』  
音が反響しながら樋口の声が聞こえてくる

『そつよね 樋口ちよつとさがつてて』  
次の瞬間背中に激痛が走った・・・

操緒は笑っていた・・・  
・・・鬼だ

目が覚めた時は、背中からの激痛と、死の予感がした。

和葉は俺を起こすために、わざわざ「かかと落とし」などという大技を使っていた。

「お前・・・そこまでの事ないだろ・・・ 普通に起こしてくれ普通に・・・」

遠のく意識の中、震える声で文句を言った  
そして樋口が、机に倒れこむ俺に視線を合わせて、

「ハル、喜べ」

この状況で何を喜ばばいいのだ！ と、心の中で叫んだ。

「昼だ」

俺はそれを喜ばばいいのか・・・ て言うか俺は2時間も寝ていたのか！

「わーい お昼だー・・・」

よし！ 今俺に出来る精一杯の喜び方だ・・・

そのまま、俺は深い眠りにつこうとした時、樋口が目の覚ます一言を言った

「奴が・・・復活したそうだ」

俺はそれを聞いて目を見開いた

「その情報は確かか？」

「俺の情報網に引っかけたんだ。確かに決まってるんだろ」

樋口は、クラスでも有名なくらい情報通で知られている。

この学校の事なら何でも知っている。

そして、何故かこの学校にいる女子全員のスリーサイズ全てを知っている・・・ まともな手段で手に入れたとは思えない・・・

「奴が復活したか・・・ 大変な事になるぞ・・・」

樋口が真剣な顔で答えた

「俺たちも急がないと、間に合わなくなる・・・」

そして、この会話についていけない和葉は、俺と樋口の顔を見比べている

「え ちょ、何の話 何が復活したの？」

俺と樋口は、和葉のこの質問に声を合わせて、こう答えた・・・

「コロッケサンド」

和葉は、はっ？、と言った顔をしていた。

「だ、だったら何が大変な事になるの？」

この質問には、樋口が答えた

「コロッケサンドは大人気商品でな、これが売られている日はいつも購買部は人であふれかえる」

そしてそこに、俺がもう一説明足し加えた

「3カ月前までは、毎日コロッケサンドは購買部で売られていたんだ。でもある日、コロッケサンドをめぐって、14人が怪我、3人確信犯、30人コロッケサンド購入と言う大惨事が起きた・・・」

「確信犯って・・・」

和葉は呆れ返ったように言った

そこに樋口が、

「ハルもう時間だ。購買部が開くぞ」

現在時刻 12:15

購買部開店時間 12:30

「よし！分かった 今行く」

俺が和葉を残して教室を出ようとした時、いきなり樋口が和葉に向かって叫んだ

「苑宮、安心しろ。お前の分まで買ってきてやるから」

決めポーズまで決めていやがる・・・

この調子だと、今週中にもう一回振られるな・・・

そう思いながら、俺は購買部に向かい走っていた。

## コロッケサンド

俺たちは今、学校の屋上にいる。

昼飯をここで食べる事にしたからだ。

俺の今日のメニューは、コロッケサンド1個、サラダサンド2個、焼きそばパン1個だ。

コロッケサンドは、死にそうな思いをして手に入れた。

和葉のメニューは、お手製のお弁当だ。色鮮やかでとてもバランスの良いおかずだ。

そして、樋口が買ってきたコロッケサンド。

その樋口のメニューは、コロッケサンド1個、納豆が4パックだ・

樋口は、和葉のためにコロッケサンドを命を掛けて、2個購入した。だが、樋口は和葉のコロッケサンドで体力を極限まですり減らし、最終的に手を伸ばし掴んだのが納豆の山だった・・・

俺と和葉は、普通に会話をしながらご飯を食べているのだが、樋口は、一瞬でKOをくらってしっまたボクサー、みたいな顔で黙々と納豆をかき混ぜ続けている・・・

それを見た和葉は、樋口の買ってきたコロッケサンドを手に、慰めるようにして、

「お、美味しいよ これ美味しいよ、樋口」

満面の笑みで言った。

そう、そうだよ。女の子はそういう時に笑顔を作るものなんだよ！

脅す時じゃなくてさ・・・

そこに樋口が、不気味な笑顔を作り

「そうか・・・ 喜んでもらえてなによりだ。 命を掛けたかいが

あったよ・・・」

「うっ・・・」

和葉が引いた・・・

俺は、そこにフォローをいれた

「ひ、樋口 俺のサラダサンドと納豆、交換しようぜ、な  
そこに、また樋口が不気味な笑顔をつくり

「いや いいよ・・・俺、納豆、好きだから・・・」

「・・・」

「・・・」

言葉が出ない・・・

「おい誰だよコイツ！ 樋口はこんなじゃねえぞ!!」

これは、樋口の顔をした何かだ。樋口を、本物の樋口を出せ!と、  
心の中で叫び続けた・・・

## コロッケサンド（後書き）

次回予告

晴紀たちが多少奮闘します

## トラブルメーカー

現在時刻 17:40

樋口はあれからも、しばらくあの調子で、俺たちは慰めるのに無駄に時間を掛けてしまい今に至る・・・

俺たちは、部活動には入っていないので、早めの時間に帰れるはずだったのだが・・・

俺と和葉は、帰り道がほとんど一緒なので一緒に帰るという事になる・・・

だが、なぜか樋口も一緒に帰っている・・・

樋口が言うには、『苑宮をお前一人じゃ任せられないからな、俺も一緒に帰ってやる』だそうだ・・・

この時期は、この時間にも充分薄暗い

「なんか、よくドラマとかで人が刺される時は、こんぐらい暗さだよな。」

樋口が言った・・・

縁起でもない事言うなよ・・・

「あつ 確かにそうかも」

和葉が笑いながら答えた

何でこんな事で話が盛り上がってるんだよお前ら・・・ 怖えーよ・・・

そして、和葉が何かをひらめいたように

「あつ でも、別に私達、人に恨まれるような事してないから、刺される事はないと思うけど」

そっだよ。別に、俺たち何もしてないんだから襲わせる心配はしなくいいんだよな・・・

そこに、突然樋口が

「ちよつと、悪い ここで待っていてくれ」

「何だ、別に良いけど・・・ 何処に行くんだよ」

おれの質問に対し、樋口は

「少し 喉が渴いたから、そこでジュース買って来るけど、何か飲むか？」

俺は和葉に、何か飲むか、と目で聞いた。

そして、和葉は、私はいい、と目で返事をした。

「俺たちは、いいよ」

「そうか、んじゃ 行ってくるから、ここで待ってるよ。」

と言う風に、俺たちに念を賭けて、自販機の方へと走って行った。

樋口は、何を買うのかを、事前に決めていたらしく、それほど迷う事無く何かを買って戻って来た。

「うーっす お待たせ」

その手に握られていたのは、缶コーラだった・・・

「何で、わざわざ缶ジュース買って来んだよ。すぐに炭酸なくなんぞ・・・」

俺の指摘に、樋口は

「いいんだよ 缶の方がボトルより20円安いんだぞ。それに、お金を大切にする奴は、後でいい事があるんだぜ」

ただ、ケツチっただけだろ・・・

それに、誰だ！こいつに、間違った知識を教え込んだのは・・・！そんな事を尻目に、樋口はコーラの蓋を、「プシュッ！」と、いい音と共に開けて一気に飲み干す。

なるほど・・・ これなら、炭酸がにげる心配はない。

「プハーアー あー、生き返ったー」

と言い、ゴミと化した缶をここから10mほど先のゴミ箱に向けて投げつけた・・・

「あつ・・・」

と和葉が、樋口が投げた着地予定地点付近を見て、何かにきずいた。

「あつ・・・」

と俺も、和葉のしている先を見て、多分和葉と同じ事にきずいた・・・

そこには、お兄さんが立っていた。いかにも不良といった不陰気を  
出している見知らぬスキンヘッドのお兄さんだ。

ふふ・・・ まさかな・・・

ほんの1秒・・・ いや、もっと短かったかもしれない。だが、こ  
の時間は、本来の時間よりも何倍も長く感じた・・・

『お金を大切にする奴は、後でいい事があるんだぜ』先ほどの樋口  
の言葉が、脳裏をよぎった。

そうだよ、樋口はお金を大切にした。きつと、お金の神様は俺たち  
を見捨てないよ・・・きつと・・・

ゴツツ、ガシヤン

入った・・・ ちゃんと、ゴミ箱に入った・・・ お兄さんの見事  
なフラインプレーにより・・・

おい、誰だ！この馬鹿に間違った知識を教え込んだのは！

「あぁー・・・」

お兄さんがとても、怖い目で俺たちを睨みつけた

俺と和葉は、同時に樋口を指差した。

お兄さんの視線は樋口に向けられた。

樋口は、振るえながらもお兄さんに親指を突き立てて、震える声で  
こう言い放った

「ナ、ナイスヘディング！」

ははは・・・

・・・終わったな・・・

「おい てめえら・・・ふざけてんのか。普通・・・人に物ぶつ  
けたら謝るもんだよなあ・・・ そうだろ？」

「・・・はい」「」

俺たちは声を合わせて答えた。

お兄さんはゆっくりと近づいて来る・・・

こんな時の和葉は、とてもか弱く見える。これは、俺の気のせいに間違いはないのだが……

そして、俺たちは近づくお兄さんにはれないように、目で緊急会議を開いた。

『おい 樋口、お前よくもやってくれたな!』

『あなた 後で処刑よ!』

と言う風に、文句の連打を与えた……

そんな俺たちに話を変えるように樋口が訊いた

『それより どうすんだよ このままだったら、フルボッコ決定だぞ』

てめえ、誰のせいだと思ってるんだ……

『大丈夫 相手はまだ一人よ』

この意見には、俺も耳を……ではなく、目を疑った。

『おい それはどう言う意味だよ』

俺が訊いた……

和葉は答えた

『そのままの意味よ 相手は一人、こっちは三人、勝てるわ』

勝つ気がよ……

しかし、和葉の意見には一理あった。

そうだ。数ではこっちの方が多し何とかなるかもしれない。

樋口が小さな笑みを浮かべて、

『俺は、賛成だな。 ハル、お前は……』

てめえ、誰のせいだと思ってるんだ……

だが、この意見には

『俺も、賛成だな』

俺も小さな笑みを浮かべて答えた。

和葉も笑みを浮かべて

『なら決まりね』

そうだ、俺たちなら勝てる。

俺は、つくづく思った。持つべき物は、(馬鹿以外の)友達なんだ

と・・・

『なら 作戦を言っね』

反対する者は、いなかった。

『まず 樋口が相手の気を逸らすために適当に殴りかかって』

簡単に言えば、困である・・・

『ええ 何で俺が・・・』

『誰のせいで、こんな事になったと思ってんの・・・』

和葉が樋口を睨みつけた。

『うつ・・・』

樋口が黙った・・・

そして、何も無かったかのように続きを話始めた・・・

『その次に、ハルが隙を見て相手の動きを封じて』

よし、悪くない役割だ。

俺は、小さくうなずいた

『そして、私が、とどめをさすわ』

いいとこどりは、この事なのだろう・・・

「おい 何さきつからこそこそしてんだ？ 覚悟は出来てんだよな？ ああ・・・」

相手との距離は、約2mほどだ・・・

作戦決行のためには、充分近づいた。

『樋口 行けるわね？』

和葉が訊いた。

樋口は、少しだけ顔を引きつっていながらも、

『あ、ああ 俺に任せろ』

と、強気の発言をしているが、足はガクガクに震えている・・・

殴られに行くようなもんだもんな・・・

樋口のまいた種なのだが、少し同情する・・・

「だから、何さつきからこそそしてんだよ！」

相手が、俺たちめがけて踏み込んだ。

ふっ それを待っていたんだよ！

樋口、出動！

樋口も相手めがけて思いつきり踏み込んだ。

「くらえ！ 正義の鉄拳！ 琢磨スクリュー」

樋口全力を出して、相手に殴りかかった。

相手もまさか殴りかかって来るとは、思っていなかったらしく戸惑っている。

おお、このままだったら樋口一人で勝てるかもしれんぞ・・・

樋口の拳は、相手の顔を捉えている。

よし 行つけえええー！

樋口は叫ぶ。

「うおおおおおー！ ぐはあ！」

・・・届かなかった・・・

相手は、避けれないと判断し、右フックを樋口のボディに叩き込んだ

樋口・・・ さっきまでの、俺の期待、返せ・・・

「うらあ 調子に乗ってんじゃねえぞ 殺すぞ」

うわあああ・・・

樋口は最初の一発で倒れこみ、腹を蹴られまくっている・・・

今日食った飯が、納豆で良かったな・・・

だが、樋口しつかりと役目をこなしていた。

そして、樋口は痛みをこらえて目で、俺に訴えてくる・・・

『い、行けえ！ハル い、今だ！』

そう、告げると樋口はゆっくりと目を閉じた。

樋口の口は、少し微笑んでいる様にも見える

樋口は、俺たちを信じている。

和葉もそんな樋口を見て、驚きを隠せないでいる・・・

樋口・・・

そうだ。次は俺の出番だ・・・

樋口、お前の犠牲は、決して無駄にはしない。

俺、出撃！

俺も相手に向かい、思いつ切り踏み込んだ。

相手も俺にきずいた。

えっ・・・ ウソ ヤバイ・・・ やられる・・・

だが、異変はその時にはもう起きていた・・・

向こうも、俺の方へ向き代えようとして、その異変に気がついた

気を失っているはずの樋口が、相手の右足にしがみついていた。

「何だ こいつ放せ、放せ！」

相手も、樋口の行動に少し顔を引きつらした。

部外者から見れば、樋口はとても不恰好である・・・

だが、俺たちから見ればこれほど格好の良い樋口はない。

俺は、戸惑う相手の後ろに回り、相手の両脇に手を回し、自分の肩を握った。

「このお てめえら、何なんだよ！」

俺は、その言葉を聞いて、少し微笑んだ。そして、最後の一人に向かって叫んだ。

「行けえええ・・・！ 和葉あああー！」

和葉は、もう踏み込んでいた・・・

「うん 任せて！」

和葉は、笑っていた。

相手は、右足、両手を封じられている・・・

相手も、もう殺られると感じただろう。目が少し涙ぐんでいる。

和葉のパンチは効くぜ、と心の中で教えてあげた。

和葉が拳を握った・・・

この泣きっ面にパンチが飛んで来るんだと俺は、思った・・・

だが、和葉はなぜか勢いを止めずに、肝心な所で拳を下に振り下ろした。

え・・・ この、距離まで来て、何で・・・  
だが、和葉の拳に換わって、右足が振り上がって来た。  
え・・・ 蹴り？ 何処を？

和葉の足の行き先を俺は、予測した。

・・・ 股の付け根

和葉の足は、正確に股の付け根を捉えていた・・・

「うりゃあ！」

そして、和葉の足は、ものすごい勢いで、股の付け根を蹴り上げた。  
殺りやがった・・・

「だっ・・・！」

と言う、短い悲鳴だけ上げて、お兄さんは口から泡を吹いて力が抜けた・・・

俺は、お兄さんの呪縛を解いてあげた。

そして、股間を押さえながら、ピクピクけいれんするお兄さんに向かい手を合わせた。

痛いだろうに・・・

この痛みは、俺たち、男にしか分からないのであろう・・・

いくら敵だったとはいえ、少し同情してしまう・・・

そして、和葉は、

「す、少しやりすぎたかな・・・」

そして、俺は手を合わせたまま答えた

「やりすぎだ・・・」

## トラブルメーカー（後書き）

今回はちょっととしたトラブルや、日々日常的和葉と樋口と晴紀の行動を書いてみたつもりです。

## 終戦

現在時刻 18:20

終戦から、ちょうど30分がたった・・・

俺たちはまず、気絶している樋口を近くの、背もたれが無い寝かせやすそうなベンチに、運んだ。

お兄さんも、あのまま道端でピクピクさせる訳にはいかず、樋口がいるベンチの近くに転がしておいた・・・

そして、今まで眠っていた樋口が目を覚ました。

「わ、わああ」

樋口が目覚めの一言目だ。

どんな、夢を見てたんだ・・・

樋口には、目立った外傷はないが、骨や、頭にダメージがないか心配ではあったのだが・・・

「お、ハル さっきそこに水着の女の人がいなかったか？」

元気だなによりだ・・・

いったい、どんな夢見てたんだよ・・・

だが、ここは素直に答えてあげた

「こんな時期に、そんな人いると思うか・・・ いるなら会いたいが・・・」

さりげなく、本音を吐いておいた。

ちょうどそこに、ジューズの買出しに行っていた、和葉が戻って来た

「あ 樋口 目が覚めたの」

樋口は起き上がり

「おう 苑宮」

和葉は、樋口に買って来たばかりの、温かいコンポタージュを手渡した。

「お サンキュ」

と小さなお礼だけいって、蓋を開けた。

俺も和葉にコンポタージユを受け取って、樋口の隣に座った。

そこに和葉が、

「ちよつと 空けて」

と言ってきた。 つめろと言う意味である

だが、このベンチは二人用なので、三人はすこしきつい。

樋口は黙って端の方へとずれた。

俺も、買出しに行かせた身なので、断る事は出来ず、大人しくつめた。

二人用のベンチに、右から、樋口、俺、和葉という順番に並んだ。

真ん中にいる俺は、一番きつい。

そこで俺は、一つ提案をした

「お、俺、立とうか？」

と言って立ち上がるうとすると、和葉が俺を引き止めた。

「ま、待って」

突然の申し出に俺は、

「へ？」

と言う声を上げた

そして俺が、何で？、と言った顔になると和葉が理由を述べた。

「み、みんなで集まった方が、温かいでしょ？」

ああ、なるほど。たしかに、こんな時間になると肌寒い。

「ああ、確かにそうだな」

と言って、俺は座りなおした。

この時、辺りは暗くてよく見えなかったのだが、和葉の顔が赤かった気がする。 まあ、気のせいなんだろうが・・・

それより、先ほどから樋口が静かなのだが・・・ 何してんだ。

樋口は、何か不思議な物を見ているような顔だ。

何、見てんだ？

俺は、樋口の見ている方角を見た。

和葉も俺に続いて、同じ方向を見た。

そこには彼が居た・・・

自販機の光に照らされピクピクしていた。

「あー・・・ すっかり忘れていた。」

しかし、終戦から30分も経っているのに、まだ痛むのか・・・彼のスキンヘッドが、自販機の光に照らされ、弱々しく光を放っていた・・・

そんな彼を見て、和葉が小さく、いたそー、と呟いていた。

「お前がやった事だろう・・・」

そして、樋口がとうとう俺たちに尋ねてしまった、

「あれ、何だ？」

和葉が、

「さっきの、ハゲたお兄さん」

と、答えた。

「おいおい、酷い言われようだな・・・」

樋口は、もっと不思議そうな顔をする、

「だよな・・・ だったら何で、あんなピクピクしてんだ。どっ、

殴ったらあんな事になんだよ」

樋口、お前は根源的そこから間違えている・・・

そう、彼は・・・

「殴ったんじゃないくて、蹴り上げたの」

和葉が平然と答えた。

「蹴った？ どちらを・・・」

樋口は訊いた。

しかし、樋口はもうきずきかけている。和葉が、どこを蹴り上げたかを・・・

和葉もこれに答えるのには、少々抵抗があったらしく、代わりに俺が答えた。

「股の、付け根だ・・・」

俺はあえて遠回しに答えたのだが・・・

「ち コか！」

意味が無かったようだ・・・

そこに和葉が焦って、

「ちょ、ちよつと 大きな声で言うな」

そして、樋口の顔に和葉の拳が飛んだ……

おい、俺を挟んでするな。危ないだろ……

俺も当たらない様にと、体を少し後ろに引いた。

だが、樋口は和葉の拳をよけた。

「えっ ちよつ ウソ」

まさか、かわされるとは思っていなかった和葉がバランスを崩して、俺の肩を握った。

和葉に肩を持たれた俺は、体重がかけられどんどんもたれかかって行く

だが、このベンチには背もたれが存在しない。

俺はそのまま抵抗がない状態で背中が、ありえない方向に曲がった。

「うわああ ちよつ やばい こ、腰が……」

「うわ ゴメン い、今どくから……」

幸い俺は、ギリギリ致命傷を逃れている

「うそ!? ち、力が入んない」

えっ ウソだろ……

たしかに和葉も不自然な体制で力が入りにくそうだった……

がんばって、力を入れようとしているのだが、踏ん張るので精一杯

のようだ。

俺の両手も和葉が被さっているせいで使えない……

そして、これ以上体重をかけられたら、ダメだろう……

「ひ、樋口!」

俺は、助けを求めた。今の俺たち、助ける事が出来るのは樋口だけだった。

だが樋口は俺たちを見ずに、お兄さんに手を合わせて、目を閉じていた。

「ちよつと、樋口 何してんの! 助けて」

和葉が叫んだ。

そうしている間にも、俺にはどんどん力が加わって来ている。

ヤバイ・・・マジでヤバイぞ・・・

「樋口 おい！ 樋口！」

俺は必死で叫んだ。

そして、もう一つ限界が近づいていた・・・

和葉だ・・・

「ハル 私、ヤバイ もう、これ以上・・・」

おい、大ピンチだ。

彼はまだなのか！まだスーパーマンは来ないのか！

「和葉、がんばれ あと少し踏ん張れ」

彼が来てくれるはずだ。だって彼はヒーローなんだから・・・

それまで俺は叫ぶぜ！

「樋口！ 樋口！ ひ、樋口いいい！」

「ああ もう、無理」

「和葉！」

ヤ、ヤバイ 腰が・・・！

「ひ、樋口！ た、たす・・・助け・・・て ひぐ・・・ひぐ、ち

たす・・・ひ・・・、スー・・・パ、マン・・・」

そして限界が訪れた・・・

「ゴメン、ハル・・・」

そして、和葉からの援助が消えた・・・

ポキンッ！ すごい音と共に、俺の腰は、有り得ないほうへと、

曲がりきった・・・

「がばあああああああああ！！！！！」

最後まで、彼は来なかった・・・

## 終戦（後書き）

次は和葉をミニスカサントにしたいと思います（好奇心）

## サタンさん(サンタ)

現在時刻 19:15

俺は今、我が家に居る。

あのあと、俺がどうやって家に帰ったのかは覚えていない。

そして、今俺はリビングのソファアの上で、腰にシップを貼る作業をしている。

なんか俺、おっさんみたいだな・・・

背中に手を廻す度に腰に激痛が走り、なかなか上手く貼ることが出来ない。

そのせいで、シップをもう4枚ダメにしている・・・

そして、俺の視線はカレンダーへと向かった・・・

そうか、今日クリスマス・イブだったわけ・・・

最悪のクリスマス・イブだったな・・・

不良に襲われたり、腰を痛めたり・・・

いろいろあったせいで、買出しに行く事が出来なかった。

くそ、ケーキぐらいは食いたかった・・・

そして、俺の視線はカレンダーから、机の上にあるものへと向かった・・・

カップ蕎麦・・・

「ははは 最っ高のご馳走じゃねえか」

と、皮肉を言い放った。

その時、

ピンポン、

と、家のインターホンが鳴り響いた。

ん？ 誰だこんな時間に・・・

出ない訳にはいけないので、俺は立ち上がった。

ズキッ！

「わぁお！」

と妙な悲鳴を上げて、玄関に向かい歩いた。  
鍵を開けて、ドアをゆっくりと開いた。

そこに立っていたのは、和葉と樋口だった。

そして、和葉は、恥ずかしそうにこの日にふさわしいであろう格好  
をしていた。

あの、赤い服をまとって世界中の子供たちに、夢と希望を与える、  
あのおじいさんの女の子モデルだ。

しかし俺には、あの愛くるしいおじいさんの名前を口にする事は、  
出来なかった・・・

そう、こいつは、あの恐怖と絶望をもたらす怪物にしか見えなかつ  
た。その名は、

「サタン・・・」

「殺すわよ」

「すいません」

すぐに謝った。

今の俺は、和葉からだけからではなく、外部から攻撃に耐え切れる  
自信がない。

「サンタだよ、サ・ン・タ」

ははは、と樋口は笑いながら言った。

まあ、見れば分かるが・・・初めて生で見たぜ、ミニスカサンタ  
この服も、多分樋口が着せたのだろう・・・

その樋口の顔には、いくつかあざがあった・・・

あのあと、和葉に散々殴られたのだろう・・・

それもそうだろう、俺もどれだけ殴ってやろうと思った事か・・・  
そして、俺はきずいた。和葉が右手に、白い箱が入った袋を持って  
いた。

「ん？ なんだそれ・・・」

と言って、俺は白い箱を指差した。

その質問に和葉が答えた

「ああ これ・・・」

と言って、箱を自分の顔の横に掲げて続けた、

「ケーキ、買って来たからみんなで食べない？」

・・・サンタだ。今の和葉は、正真証明のサンタだ。今の俺にとっては、ケーキは夢と希望だ。

カップ蕎麦で、クリスマス気分を満喫しようしていた俺にとっては、今の和葉はサンタだ。

そして、俺は迷う事無く答えた。

「食べる！」

そしたら、和葉の顔が嬉しそうになり、

「そう？ なら入るね おじゃまします」

と言って部屋に上り込んだ、

それに続き樋口も

「なら、俺も じゃまします」

俺も樋口が入った後に玄関を閉めて、鍵も閉めた。

鍵、変えようかな・・・

そんな事を思っていると、俺の後ろで和葉が訊いた、

「ねえ ちょっと、ハル これ何？」

ん？ 何の事だ。

振り返ると、和葉はソファアの上に放置されている、白い布状の物を指差していた・・・

それは、俺がさっきまで苦戦し続けていた、シップの残骸であった。

「ああ、それ 俺が貼るのに失敗したシップ君たちだ」

和葉が呆れたように言った。

「こんなのに、失敗するの ハルってそんなに不器用だったっけ？」

俺もこんなに不器用ではない。俺も和葉に反論した、

「腰が痛くて なかなか貼れないんだよ」

それには和葉も納得した。

「あー なるほど だったら私、貼るの手伝おっか？」

和葉の提案には、たいして断る理由はない。

と言うか、俺一人では多分何時間かかっても無理だろう・・・

「だったら、頼めるか」

と俺は返事を返した。

その返事に和葉は顔を明るくして、

「うん 任せて」

と答えた。

そして、俺は和葉の近くにイスを持って行き、和葉に背中を向けて座った。

和葉は楽しそうに服をめくり上げ、

「どこらへんに貼ればいいの」

と言って、俺の背中をさわって来た。

うわっ こいつの手、冷たっ・・・

「ここらへん？」

「あ、ああ そこら辺でいい」

俺は冷たさにこらえながら答えた

和葉はシップを手に取り、ビリビリとカバーをはがした。

そして、そのまま俺の背中に貼った。

サンタの格好をした、同級生にシップを貼ってもらっ・・・

聞いたことがない・・・

と言うか、なんかこいつ、妙に機嫌好くないか。

まさか、こいつ・・・

俺の背中に落書きでもしたのか・・・

そこに和葉が、

「はい 終わり！」

と言って、パンツ！と背中を叩いた・・・

「うお 痛ってえ」

そして、和葉は少し早足に机に向かった。

そこに、樋口が、

「んー どしたあ？ ハル」

と訊いてきた。

そこに、俺は一つの疑問を抱いた、

「あれ、樋口 お前今までどこにいたんだよ」

その質問、樋口は疑問を抱いたように答えた。

「何言ってるんだ 今からクリスマスパーティーしようって言うてるのに、クリスマスツリーがないってどう言う事だよ」

「あつ」

確かに、ツリーは物置の中にしたままだった。

それを樋口はわざわざ、人の家の物置を物色して持ってきたのだ。

「おい 苑宮 悪いけど、これ組み立ててるの、手伝ってもらってよろしいでしょうか」

えっ なんで敬語？

そんな疑問を抱くと、樋口の顔についた青いあざが目に入った・・・ あー なるほど・・・ これで全てのツジツマが合った。

和葉は、樋口に敬語を使われているから、機嫌が良かったんだ。

「おい ハル ないボーとしてんだよ。お前も手伝えよ」

そんな俺に樋口に指摘された。

樋口たちは、黙々と作業を続けていた。

「ああ、悪い 今手伝う」

と言って、俺も作業に参加した。

組み立てていると、あれ、こんなにツリーでかかったけ、なんて疑問を持ったりした。

ツリーは約130cmほどで、まあまあでかいほうだった。

そして20分ほどで、組み立て終わった。

「よし これで不陰気は完璧だな」

と樋口が言った。

確かに、ツリーがあると、ないじゃ不陰気がまるで違う。

そして俺は素直に、

「確かにそうだな」

と答えた。

そして、この次はお待ちかねの、

「それじゃ ケーキ食べよっか」

と和葉がいった。

俺と樋口は、おう！、と答えて机に向かった。

ケーキは冷蔵庫にしまっており、和葉が取り出し、机に置き箱を開けた。

「おお チョコレートケーキか」

俺は、てつきりショートケーキかと思っていたので口に出てしまった。

でも、何で、

「あら ご不満？」

「いや そうじゃなくて、俺は確かにチョコレートケーキは好きだが・・・」

和葉は首をかしげて、

「それが何よ」

と尋ねた。

俺の記憶が正しければ、和葉は、

「お前、チョコレートケーキより、ショートケーキの方が好みだったのでは・・・」

「えっ」

まさか、そんな事言われるとは、思っていたたかつたらしく、少し戸惑っている・・・

「あ いや、それは、あれよ たまには違う味を食べてみたくなっただ、てやつよ」

「あー なるほどなあ」

それなら納得できた。

てつきりなんか仕込まれていたんじゃないかと言う不安は消えてなくなった。

「おい 早く食べようぜー」

樋口がフォークを銜えて、待ちきれなさそーに言った。

「あっ ゴメンゴメン」

と和葉が謝罪して、ケーキを三分に切った。

切られたケーキは、三人に配布された。

俺は、『メリークリスマス』と書かれた、板チョコが乗っている。和葉は、クリームが多い。

樋口は、砂糖で出来たサンタクロースが乗っている。

「んじゃあ」

と言う俺の掛け声に続き、全員で

「いただきます！」

と言って、みんなでケーキを食べ始めた。

樋口は、可愛い砂糖サンタにかじりついた・・・

可愛らしかったサンタは、顔が消えて、胴体しか残っていない。

残酷だ・・・

なんと言うか、もうちょっと丁寧に食べよ・・・

そして俺は、久しぶりに出した、クリスマスツリーを見た。

なんか、少しくすぐつたい気分だ。

そんな俺の気持ちを知ってか、知るまいか、ツリーの輝きが増した気がした。

そして俺は、ケーキに視線を戻し、口に運んだ。

## 初めての『夢』

あれ、ここは何処だ。

俺は確か寝てるはずだよな・・・

なのになぜか、今居るこの場所はいつもの場所じゃない。

そうだ、操緒は・・・

「おい 操緒 いるんだろ、返事しろよ」

と俺は叫んだ。

なんか、いつもの場所より気味が悪い。

なんか、濃い霧に覆われているようだ。何も見えない・・・

「ここ 本当に俺の夢の中か？」

と小さく呟いた。

操緒がからかっつてんのか・・・

だが以前、操緒の居るあの場所は、俺のイメージだって言ってたよ

な・・・

だったら、いじる事は出来ないはずだ。

すると、目の前に何か大きな影が見えた。

建物・・・？

俺は建物に近づこうとして、少しためらった・・・

ここで、一步を踏み出してしまったら、もうこの場所に戻ってこれない気がしたからだ。

この場所？ 本当にそれだけか？

俺は自分に問いかけた。

いや、これは俺の夢の中だ。迷子になろうがなんだろうが、そんな事関係ない。

俺は、何か胸に、ひかつかるものを無い事にして一步を踏み出した。影が近くなると、それが何なのかすぐに分かった。

お寺だ・・・ しかもテレビでも見た事がある建物だった。

手前には、木で出来た階段あり、その先には大きな木で出来た扉が

あつた。

すると、木の扉が少しだけ開いた。まるで、入れ、とでも言っているようだ。

霊界への扉・・・

第一印象がこれだった。

あれ、もしかして俺、びびってる？

ふん、と俺は鼻で笑った。

「ははは 上等じゃねえか 入ってやらあ！」

と、言いながら階段を少し早足で上がった。

「おりあぁあー！」

と言う掛け声と共に、

バンツ！

と、扉を開けた・・・

「って あれ？」

そこには大して何もない、畳の部屋だった。

だが、部屋の真ん中には、小さな机が置いてあつた・・・

机の上には、小さなろうそくがゆれていた。

そして、その隣には、時代劇などで出てきそうな、小さな本が閉じた状態で置いてあつた。

本の表紙に何か書いてある。

少し近づいて、それを読もうとした。

そして、そこに書いてあつたのは、

「み、さ・・・」

とその時であつた、

ザザッ

後ろで物音がした。

俺は、反射的に振り返った。

そこには、人影が階段の手前に立っていた。

霧が濃いせいでよくは見えないが、女の人の着物を着ていた。

その子は、俺から見て右側に向かって走って行った・・・

「ねえ おい、ちょっと待って」

俺は、その後を追いかけた。

その子は、お寺の後ろに回り、壁にそって走っている。

俺は、その子を追いかけながらあの部屋にあった、本を思い出す。

あの子が来たせいで、ちゃんとは見ることは出来なかったが、一部だけ読み取れた。

そこには、間違いなく『操緒』と書いてあった。

なんで、操緒の名前が・・・？

そんな事を考えていると、あの子を見失った・・・

「やべ あの子ども行っただ？」

走るのをやめて、歩いていると、また何かの影が二つ並んで見えた。人？ いや少し違う・・・

近づくとそれは、片方の影は、お墓だった。

お墓には、コケやらなんやらついていて、誰の墓かは分からない。

だが、もう片方の影は異様だった・・・

剣だった・・・

それも、結構でかい・・・

太刀は、峰がなく、両側が刃だ。

幅は、俺の胴体と同じぐらいで、長さは俺の胸ぐらいもある・・・

鐔のあるはずの部分には、大きな穴が開いて、向こう側が見える。

そして、何より印象だったのが、独特の赤いフレームだ。

太刀の、外側と、大きな穴の枠の外半分が、赤い色をしている。

何だよ、これ・・・

俺がゆっくり近づいて、剣の柄に触れようとした時、誰かに手首を捕まれた。

「どわぁ」

正直びびった・・・

よくは見えないが、さっきの子だった。

「ダメ・・・」

その子はとても冷たい声で言った。

「へ？」

「あなたは、違うから」

「違うって、何が」

それを訊いた瞬間、視界がかすむ・・・

くそ、こんな時に、俺が起きかけていやがる

風の音も、葉と葉がこすれる音も聞こえなくなる中、  
最後にその子が、小さく答えた

「あなたは、ガイアの持ち主じゃないから・・・」

・・・ガイ、ア・・・？

初めての『夢』（後書き）

ここから物語が始まっていく予定です。  
ぜひ見守っていてください。

## カメラジコン

「あなたは、ガイアの持ち主じゃないから……」  
音が何も聞こえなくなった……

そして、目の前が突然、明るくなった。

「はっ……！」

俺は、その明かりに向かって飛び込んだ……

そこには、見慣れた風景があった……

「お、起きたのか……」

リビングのソファの上だった……

外では、すずめが小さく鳴いている。

ああ、そうか俺は昨日、はしゃぐだけはしゃいでここで寝てしまったのか……

と自己分析を終わらせて、ソファから降りようとして、足に何か違和感があることに気づいた。

「えっ、ウソだろ……」

そこには、和葉がいた。正確には、眠っていたのだ……

ソファにもたれかかる様にしながら、俺の足を枕にして寝ていた。よく見ると、樋口も床の上で大の字で寝ていた。

「こいつら、何でまだこの家にいるんだ……?」

俺は、ため息混じりで呟いた……

まず、俺の足を枕にしている和葉から、どうにかしないとソファから降りる事が出来ない……

和葉はサンタの姿で、気持ち良さそうに寝息をたてている。

普段、散々こき使われているせいか、色気が感じられない……  
まあ、樋口だったら間違いないと襲われていただろう……

「おーい 和葉ー 起きろー」

と言って肩をゆすった。

いつも、乱暴に起こされているのだが、女の子相手ではそんな気に

はなれない・・・

くそ 俺はなんて弱い人間なんだろう・・・ そして、なんて優しい人間なんだろう・・・

自分を悔いて、褒めた。

「んーん おはよう それで何？ハル」

和葉が目覚めて、少し寝むたそうな目で訊いた

「お前な、人の足を枕にしといてよく訊けたな、そんな事・・・」

「えっ わあっ」

と小さめの悲鳴を上げて、俺の足からどいた。

俺は、まだ和葉の温もりが残る足でソファから立ち上がり、

「んで お前らは結局自分の家には帰らず、俺の家で一晩過ごしたのか・・・」

「う、うん まあ・・・」

床に座り込んだ和葉を見下げるようにして訊いた。

サンタの姿をして、床に座り込んだ和葉は、少し可愛く見える。まあ、絶対に気のせいなんだが・・・

少し反省しているのか、小さく見える和葉に、

「まあ 別にこの家は俺以外ないからいいんだけどな。」  
と、遠まわしに、別にきにするな、と言っておいた。

「よし 次は樋口だな。」

俺は樋口の方へ歩みを寄せた。

「おい 樋口 起きろ！」

「だあー」

起きない・・・

すると和葉がそんな俺を見て、床から立ち上がり、

「ちよつと ハル、私にもやらせて」

と言って、近づいてきた。

樋口の頭の前まで来ると、腰をかがめて、樋口の鼻をつまんだ・・・

「ん ふがっ だだあ」

と樋口が少し苦しそうに動き始めた。

て言うか、ミニスカートのサンタの衣装でそんな座り方すると、見えてしまいそうで怖いのですが・・・

「ふ、ふが だば がっ」

樋口がもつと苦しそうに暴れ始めた。

「おい、和葉 もう、そろそろ放してやれよ」と俺は指摘した。

だが、それはもう遅かった・・・

「んがっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

動かなくなった・・・

そして、和葉が手を放し、少し心配そうに、

「おい ひ、樋口 生きてる？」

そんな和葉の質問に対し、樋口は、

「・・・・・・・・」

答えない・・・

「か、和葉 お前・・・」

と俺は少し本気で和葉を指摘した・・・

和葉は、ちがうちがう、と言う風に首を振っている。

その時だった、

「ぶはあ！」

樋口が飛び起きた。

生き返った・・・

そして、少し荒い呼吸で樋口が、

「お、おう ハル、苑宮 おはよ」

「お、おはよ・・・」

少し戸惑い気味で俺は返事した・・・

すると、樋口が立ち上がりながら、夢の説明をしてくれた。

「なんか、俺のいた場所がいきなり、真空になってたな、そしたらなぜか近くに、なかつたはずの花畑が見えてな。不思議な夢だったよ」

・・・・・・・・あの世寸前・・・

俺は改めてこう言った、  
「お、おかえり・・・」

「ふーん で、ハルお前はどうしたい訳だ？」

樋口は、背中を向けたまま俺に訊いた。  
俺はこいつに、今日見た夢の話をした。

樋口は、俺の夢の中の事を知っている、たった一人の人間だ。

「まあ これまで見たことない夢だったし、『ガイア』ってやつも  
気になるし・・・」

「そんで、どうしたいんだ？」

樋口が、同じ質問をしてきた。

「俺、そこに行ってみようと思うんだけど・・・」

「行く？ その夢に出てきた寺にか？」

少し驚いたようだが、まだ背中を向けたままだ・・・

「ああ まあ、テレビとかで見た事あるし、そんな危ない所じゃな  
いだろし・・・」

「そうだとしても、京都だぞ」

あのあと、少し調べて、俺の夢に出てきたお寺が、どこにあるかを  
調べ、

出てきたお寺が、京都の「鬨石寺とせきで」だったのだ。

「それが、どうした」

俺は、訊き帰した

「いくらなんでも、遠いだろ。 夢を調べに、そんな所行く気が」

「ずっと、気になってんの、嫌だし」

「本気で行く気かよ・・・」

樋口が少し呆れ返っていた。

すると、何かを決めたように背中を向けながら言った、

「よし！だったら俺もついていく」

俺も少し意外だった。

「えっ 何で？」

樋口は自慢げに、

「ハル一人だったら、迷子になるかもしれないからな」

背中を向けられながら言われても、説得力がない・・・

「ていうか、お前さつきから何してんだ？」

と訊いたとたん、樋口が・・・

「よし出来た！」

何か作っていたようだ。

「何、作ってたんだよ」

と俺が樋口の背中に訊いた

そして、俺の方へと向きかえり、またもや自慢げに、

「ふふふ よくぞ訊いてくれた。そうこれは、秘密兵器・・・」

と言って俺に向かって掲げたのが、カメラと、ラジコンをガムテ

プでぐるぐる巻きしたものだ・・・

「カメララジコンだあ！」

ネーミングセンスが全くない・・・

俺は改めて尋ねた、

「で それは何に使うんだ？」

すると、またもや自慢げに、

「今、苑宮がなにしてるか、知ってるよな」

「ああ、今風呂は入ってるけど・・・ まさか、お前」

そう、和葉は風呂に入りたいと言ったので、今この家の風呂に入っ

ている・・・

樋口は鼻で笑いながら、

「このカメララジコンに搭載された通信式カメラで撮影された映像は、

リアルタイムでこのモニターで見る事が出来る」

「馬鹿 そんなことしたら、お前殺されるぞ」

「ふん それがどうした。こんなチャンスめったに出来ない」

こいつ、覚悟決めてやがる。少し感心した。

だが、俺はある事に気づいた

樋口の後ろには、拳を握った、風呂上りの和葉が立っていた。

それに気がついていない、樋口は、

「これを使って、苑宮の入浴姿を撮影する。」

うわっ 言いやがった・・・

くそ 興味が無い訳ではないが今はなにも言えない。

「よし そうと決まれば、苑宮の裸をバッチシこの目に納めてやる」

と言って、樋口が振り返るとそこには和葉が立っていた。

それはもう、驚いたことだろう、言葉さえ出ていない・・・

そこに、和葉が殺意のこもった声で、

「樋口 覚悟出来ているんでしょうね・・・」

「い、いや 苑宮これは・・・」

樋口は、とっさに言い訳を言おうとした。

こいつ、本当に覚悟出来たのか・・・？

だが、和葉は、樋口の言い訳を聞くことなく拳を、叩き込んだ・・・

「だがああああー！！！」

樋口の悲鳴が、我が家に響き渡っ

## カメラジコン（後書き）

樋口はネーミングセンスが無いという事をお願いいたします。

## 關石寺（前書き）

樋口のネーミングセンスもありませんが、自分自身のネーミングセンスが無いのに驚きました。

## 闘石寺

「ねえ ハルはどれにする？」

と、楽しそうに駅弁を眺める和葉に訊かれた・・・

「別に、旅行しに行く訳じゃないんだから、そんなモン買ってどうすんだよ・・・」

「えー じゃあ、何しに行くのよ」

と、唇をとがらせながら、訊き返された・・・

「それは・・・」

と答えにつまった俺は、目で樋口にバトンプスをした。

顔のアザが増えた樋口は、えっ俺？、と言う風に自分を指差している。

そして、少し戸惑いながら、樋口は答えた

「えっと それは、あれだ。 京都に着いてからのお楽しみだ。」

「何それー」

と、少し不満げに言った。

それも、そうだ・・・

今日、俺が見た夢が気になるので、京都まで行く、なんて言えるはずがない・・・

そんな事をしてる内に、京都行きの特急列車が来た。

「おー 来た来た。」

と言って、樋口が列車のドアが開くと真っ先に入って行った。

俺たちも、樋口に続いて車内に入った。

「えーと D-8、D-8つと・・・」

と言って、手元にある半券を見ながら、自分たちの座席を探す。

和葉にさきほどの樋口との会話の、京都に行く、と言う部分だけ聞き取れたようで、俺たちどうしても付いて来るといいだした・・・ちゃんと、断ればよかったのだが、樋口の欲望による悲鳴を聞いた後だったので断れ切れなかった・・・

本当は、電車を乗り継いで行くつもりだったのだが、和葉がグチグチ言うので、少し良いチケットを買ってしまった・・・

「あっ ハルこれじゃない？」

と言って和葉が指したのは、D - 8の席だった。

「おっ これだな」

席は二人ずつ、向かい合って座る席で、その席の窓側に俺は座った。和葉は、俺の隣に座った。

「お前、もう一つ窓側、空いてんだからそこ座れよ」

と俺は少し文句を言った。

和葉は、

「いいでしょ、どこ座ろうが って言うか樋口は・・・？」

と和葉は、当然の疑問にたどり着いた・・・

あいつ、俺らより先に入ってたよな・・・

とか、考えていると樋口がこの車両から出てきた。

そして、樋口は黙ったままで、和葉の前に座った。なんか、気まずそうな顔をしている・・・

「おい、樋口どうかしたか・・・？」

俺は訊いた。このままだと黙ったままで京都に着くかもしれないからだ。

こんな空気で、3時間も過ごすのは嫌だ。

「聞いて・・・くれるか？」

俺と和葉は、黙ってうなずいた。

そしたら、樋口は淡々とこれまでに、起きた出来事を話した。

「俺は、まず車内に入ると、迷うことなくB - 8の座席に座った。

そしたらおばさん達が俺の隣に座って、間違えてそのおばさんの一人に『ハル』って呼んでしまって、そしたら、そのおばさんの呼び名が不運な事にも『ハル』で、そしたら、無駄におばさん達の話につき合わされた。」

うわぁ・・・

この短時間で、そんな戦いをしてきたのか・・・

て言うか、まず座席から間違っている・・・

そして、なんとなく樋口の手元を見ると何かが握られていた。

それには、和葉も気づいた

「ねえ、樋口 何持ってるの」

「あああ これ・・・」

すると、樋口は手のひらを広げて、俺たちに見せてくれた。キャン  
デイだった

「これを、食べたら友達なんだってよ・・・」

友達寸前まで近づいたのか・・・

「樋口、・・・」

和葉が小さく樋口に向かって呟いた

「・・・ドンマイ」

結局、この調子のまま京都に着いてしまった。

京都と言うので、俺はてつきり『田舎』というイメージが強かった  
のだが、結構設備も整っていて、辺りにはマンションも建っている。  
車も意外と通っていて、ちょこちょこ人力車の姿を見るだけで、さ  
して大阪とは変わりが見受けられない。

そんな事を思いながら、辺りを見渡していると、数葉に小さくジャ  
ンバーの袖を、つんつん、と引つ張った。

すると和葉が楽しそうに、人力車の方を指差して、

「ねえ、ハル あれ乗ってみたくない？」

やっぱりそう来たか・・・

「だから、俺たちは観光しに来たんじゃないんだぞ」  
俺はきっぱり言い放った。

和葉は、えー、と不満そうな声を上げている。

そつだ、俺たちは観光に來たんじやない。調べものをしに來たんだ。ここから鬪石寺までは歩いて15分ほどだ、それほど遠い距離ではない。

すると、和葉が、

「あ、そういえば、私たち何しに來たの？」

げつ、そういえばまだ言つてなかつたな、と俺が今落居つていた危機を思い出す。

「え。あー そつだつたな 俺たちはな、ここに……」

何しに來た……？ 思いつかない……

和葉は、ここに？、と続きを言え、と言つたよつな表情になる。

答えが思いつかない……

すると和葉の後ろで、

「俺の、ばあさんの墓参りに來たんだぜ」

と、おばさんシヨックの危機から立ち直つた樋口が言つた。

なるほど、と俺は少し感心した。

電車の中では、ぼーつとしてるだけかと思つていたら、ちゃんと言い訳を考えていた……

それに、今から行く場所はお寺なので、墓参りだつたら和葉に怪しまれる事は無い。

それを聞いた和葉は、

「だつたら言つてくれれば、いつでも付いて來てあげたのに……」

それに対し樋口は、後頭部をかきながら

「わりい わりい そんな多人数で行くもんじやないと思つてな」

おお、樋口が俺の役にたつた……

「それじゃあ、行こう 樋口の墓参りに」

と和葉が言つた。

「樋口の、おばあさんの墓参りな…… 樋口はまだ生きてい……

」

と俺がツツコミを入れて、鬪石寺へと俺たちは向かつた。

その時は、大阪に歸る時にも、三人で歸ると、みんなが思つていた・

•  
•

## 闘石寺2

現在時刻 12:40

闘石寺は小さな山のふもとにあり、行き道では登り坂ばかりだった。冬だとは言え、さすがに少し汗も出てくる……

歩いて15分とは、パンフットに書いてあったのだが、もう、歩き始めて20分ほどたった……

チクシヨウ、騙された……

和葉の言う通り、人力車に乗ればよかった…… て言うか人力車つて、一人どれくらい金取られるんだ……?

とか言う事を考えていると、坂道の先に大きな建物が見えた。

「おお 天竺……」

と樋口が意味の分からない事を言っているが、ここはノータッチで行こう……

すると和葉がいきなり、天じ…… 闘石寺に向かって走り出した。

「お、お先いただき……!」

一番乗りになりたい様だ…… 安心しろ和葉、俺たちにはもう走る気力なんてない……

和葉到着から1分ほどで俺たちも、闘石寺に着いた。

土曜日と言う事だけあって、人もそんなに少なくはない。

人力車も出入りしてるようで、俺たちも乗ればよかったな、と後悔する。

「つ、着いたぞ 天竺に!」

樋口とは、他人のふりをしておこう……

「それじゃ、樋口のお墓まりに行く」

と和葉が樋口に切り出した。

和葉の言葉が正しいとすれば、和葉は死人に話しかけている、と言う、とてもシュールな光景が目に見え……

「そうだな ハル、お前はお前の用事を済ませてから来てくれ。」

と樋口が言った。

「えっ ハル、どっか行くの？」

和葉が意外そうに訊いてきた、

「え ああ、ちよっとした用事を済ませるだけだ」

と俺はあいまいのの回答をした

「んじゃ、苑宮、行こうぜ ハル、気をつけるよ」

と樋口が言っつて、俺に背を向けた。

なぜだか、樋口の言った『気をつける』と言う言葉が、とても深い

意味に聞こえた・・・

「んじゃ 俺も行くか」

と一人でつぶやき、樋口と和葉に背を向けた。

關石寺2（後書き）

短くてすみません。

## 可能性

俺はまず、迷うことなく建物の真ん中にある扉へと向かった。

俺が、『霊界への扉』と変な不安を抱いてしまった、扉だ。

扉の前に着くと、意外と人が少なくあつさりと近寄れた。

だが、目の前にある扉は、見た目は変わらないが、夢で見た扉よりもきれいだった。

扉をゆつくりと前に押すと、ギギイツ、と音を立てながら開いた。

中に入ると、そこは畳張りではなく、木の床だった。

薄暗くてよくは見えないが、なんか、夢で見たのとは少し違う。

と、その時だった、

「そこで、何をしている！」

「どわあ」

と、いきなり右側から怒鳴られて、変な声が出てしまった。

そこには、私服の胸元に、ここの従業員の証である名札をした男の人が立っていた。

「ここは、立ち入り禁止のはずだが！」

と言って男の人は、『立ち入り禁止』と書いた立て札を指差した。

「すいません ちよつと中を見たくて……」

とここは、素直に謝った。

だが、ここまで来たんだ、何も収穫なしでは引き下がれない。

「あの すいません ちよつと訊きたい事があるんですが、いいですか？」

男の人は少し意外そうな顔をしたが、

「ああ べつに構わないが……」

と言う答えが返って来た。

「あの ここの扉っていつからあるんですか？」

まず、俺がここに来て一番最初に気になった事だ。

「ああ この扉は、このお寺が建った時からあるから、80年ほど

昔だが、18年前に一度作り直している」

これで、一つの可能性が消えた。

「だったら、中もその時に……」

と二つ目の質問をした。

「ああ そうだよ 中も相当古くなっていたからね……」

「もしかして、床張りになる前は、畳張りだったりって事あります？」

その質問には、男の人は嬉しそうに、

「へー 君、結構詳しいんだね。 そうだよ、古い畳だったからね、カビも生えてたんだよ。」

これで、二つ目の可能性が消えた。

俺はここに昔来たことがあったので、その記憶がよみがえって夢に出てきたんじゃないかと少し思っていた。

だが、この扉や部屋が新しくなったのは、18年前、俺がまだ産まれる前だ。

覚えているはずのない事が、夢に出てくるなんて事はない。

テレビの可能性もあるが、ここが有名になり出したのは10年ほど前だ。

昔の映像があったとしても、カビの生えた部屋を、わざわざテレビで流すとは思えない。

「あの この住職さんって、今何歳ですか？」

男の人は少し意外そうな顔をして、

「確か、68歳だったと思うけど、どうして、そんな事訊くんだ」

「いえ 少し学校の課題の一つで……」

適当な事を言っておいた……

男の人は、感心したように、

「へー 今ごろにもそんな学生がいたか……」

そう言うと、男の人は俺に背中を向けて、

「それじゃあ 俺は、仕事に戻るが、まだここに居るか？」

「いえ 仕事の邪魔をすいません」

と俺は謝った。

「そうか 少年も勉強にはげめよ」

と言って、行こうとした所を俺が、引き止めた

「あの すいません あと一つだけいいですか？」

男の人は立ち止まって、顔だけを向けた

「このお寺の裏に、お墓が一つだけあつたりしますか？」

男の人は、答えまでに少し間を開けると、

「はははは そんなのはないよ。表にならたくさんあるけどね・・・

」

そう言うと、男の人は俺に手を振りながら、仕事に戻って行った。

墓は・・・あるな・・・

これは、理屈がどうか、可能性がどうかじゃなくて、単に俺の勘だ。

なんとも言えない確信を胸に、俺は部屋を後にした。

## お団子トラップ

「んで あったのか、その墓は・・・？」  
樋口が訊いてきた。

俺は、あの部屋を出てすぐに樋口たちと合流した。  
それで、今までの収穫を全て話した。

「いや まだ探してない」  
俺は少し間を空けて、もう一説明した。

「だけど パンフツレットを見る限り、そんな墓ないんだよ・・・」  
「でも ただの夢じゃないのは確かなんだろ？」

「ああ・・・」  
「だったら、あんだろ どうか・・・」

なんの根拠で言ってるんだ・・・  
そして、俺はあることに気づいた、

「なあ 和葉はどこ行ってんだ」  
「ああ 苑宮だったら、団子買いに行っただぜ」

団子・・・？何のために・・・  
「なあ ハル お前は、苑宮にこの事、話さなくていいのか？」

樋口が少し深刻そうな顔をして言った。夢の事だろう・・・  
いつも、おちゃけているだけに、何故かこう言う時は説得力がある。

・・・  
「これは、俺の『妄想』だって、医者には言われてんだ。話したと

ころで、バカにされるだけだ・・・」  
樋口の顔が、一瞬だけ悲しそうになった様に見えた。

その時、和葉が戻って来た。  
右手には、小さな袋を持っていた。

「あ ハル、調べ物は終わったの？」  
和葉が直球に訊いてきた、

「いや、まだ終わってはないな・・・」

和葉が、団子のパックを一つ取り出すと俺に渡しながら、言った

「だったら、ここから私たちも、同行するって事で……」

団子を食っていた俺は、串を喉に突きかけた……

そして、団子を口に含んでいる俺は反論が出来ない……

和葉は、話を続ける、

「私たちも、お墓参りも終わった訳だし、ハルを待っとくって言うのも暇そうだし……」

団子がなかなか飲み込めない……

頼みの綱の樋口は、楽しそうに俺たちを眺めている。

この時、俺は気づいた……

こいつら、グルだ……

「と言う訳で……」

ヤバイ、この先を言われたら……

俺は、急いで団子を飲み込まなくては……

そして、和葉は言った、

「今から、一緒に行動するって事で……!」  
言われてしまった。

団子は飲み込んだ。だが、ここで反論したら、間違いなく和葉に殴られるだろう……

まあ、大事な事はもう済ませてあるし、後は墓探しだけだし、大丈夫だろ……

和葉はとても楽しそうに団子を食べている。

樋口も楽しそうに、それを眺めている。俺も残りの団子ちゃんと、味わって食べる。

だが、この時は誰が思っただろう……

この後、俺の人生の歯車が、有り得ない方へと動きだすだなんて……

## お困りトラブル（後書き）

ヤバイ、アイディアが気持ち悪いくらいに湧いてくる。

## 白い闇

俺は、見た夢の記憶を頼りに、墓を探していた。

あの時は、壁にそって走っていたのでその通りに進んでいく。

あの時と違い、霧はなく前がよく見える・・・

「ねえ 本当にこんな所にお墓なんてあるの？」

和葉が言った。

そんな疑問を抱くには無理はない・・・

実際の所、俺もそう思っている。

「あるだろ 多分・・・」

樋口が、鼻の穴を小指で、クリーニングしながら言う。

こいつ、後で覚えてるよ・・・

「ねえ ハルってさあ 何のために、そのお墓探してんの」

突然の質問だった・・・

あれ 俺、何のために墓探してんだ・・・？

「もしかして、墓荒らし？」

こいつ、なんて事言い出すんだ・・・

「そんなんじゃない・・・」

俺は、静かに反論した。

「じゃあ なんのため？」

「・・・俺のため・・・？」

すると、突然腹部に衝撃が走った。

「ぐふう！」

「真面目に訊いてるのー！」

いやいやいや、こちらもとてつもなく真面目に答えたつもりなのですが・・・

その時、樋口が俺の肩を叩いた。

「ん？ どした、樋口」

樋口の顔は、引きつっている

「なあ ハル こんな事つてあるのか・・・？」  
すると和葉も、

「えっ ちよっ 何よ、あれ？」

俺も樋口たちの見ているほうを見た。

「何だよ 自然的なものじゃ、ない、よな・・・」

それは、霧だった。ただの霧だったら驚きなんてしない。

まるで、波の様に俺たちに迫って来ていた。

俺たちをここから先へとは、行かすまいとしている様に・・・

そして、霧は俺たちを一瞬で飲み込んだ。

「うわ 何だよこれ 何もみえねえ」

樋口の声だけ聞こえる。

確かに、何も見えない。

「ちよ ハル ハル、どこ？」

和葉の声がする。

「おい ここだ！」

俺は、和葉の声がした辺りに向かって叫んだ。

だが、

「おい 苑宮 ハルはどこだ」

樋口？あれ、今の聞こえなかったのか？

「おい 樋口、ここだ。今どこら辺にいる？」

だが、まるで俺の声が聞こえてないように、和葉が

「分からない ハル！ どこになのよ！」

続いて樋口までもが、

「おい ハル、いるなら返事しろお！」

「おい 俺はここだ！」

どんどん和葉たちの声が小さくなる。

「ハ・・・！ ど・・・にい・・・の？」

俺も必死で叫ぶ

「・・・！！！」

あれ、俺の声が聞こえない・・・

「……………!!!!」

いくら叫んでも、叫んでいる気がしない……

そして、俺は音も、光もない、白い闇に閉じ込められた……

## 有田晴紀の『死』

突然、目が見える様になった。

ここは、どこだ？

和葉は？ 樋口は？ あいつら、どこにいるんだ？

あれ？ 俺、今倒れているのか・・・ 空が、目の前にある

何でだ・・・ 空が赤い

『チツ』

え？ 誰だ・・・

俺を、見下ろしている・・・

『これじゃあ 俺は何しに来たんだ？』

こいつ誰だ・・・？

『なんで こんな時に・・・』

くそ、体が動かない・・・

『死んだりするかなあ』

え・・・ 死んだ、誰が・・・？

『悪いが お前はまだあの世には送れない・・・』

何する気だ・・・？

『ゾイド！』

なんで、剣が・・・？どこから・・・

『しばらくは、お前にガイアを預ける・・・』

ガイア・・・？

『だから もう、死ぬなよ・・・ 晴紀・・・』

え・・・ は・・・るき・・・

有田晴紀の『死』（後書き）

これが今回の『謎』です。

書いたのはいいですが、この先のストーリーが何通りもあってどれをするか迷ってしまいます。

## 化け物

「うわああああああ!!!!」

気づくと俺は、頭を抱えて叫んでいた。

頭が殴られたように痛かった・・・

「ちよっ ハル、どうしたの？」

「・・・か、ずは・・・？」

周りの霧が晴れている・・・

「おい ハル どうしたんだ？」

樋口か・・・

「俺、何してた・・・？」

俺は震える声で訊いた、

「さあ 霧が晴れて、お前を見つけたら、うずくまりながら震えてたぜ」

樋口が心配そうに言った。

「どうしたの ハル 何かあったの？」

何か？ 何かあったんだ？

あれは、何だったんだ・・・？

「分からない・・・」

「何よそれ？ あんなハル初めて見たよ・・・!!」

和葉が心配そうに言う・・・

本当に分からない。

あれは、ただの夢だったんだよ・・・ そうとしか、考えられない・・・

そして、樋口が、

「ハル 良い医者、紹介しようか？」

俺は、操緒の事を話した時に樋口がづれて来た、あの時の医者を思い出した・・・

「いや いい もう二度とお前が紹介する医者には、診てもらわな

いって誓ったんだ……」

断った…… そうだ、あの後、散々な目にあっただから……  
そして樋口が何かを思い出したように、

「で どうする？ このまま引き返して大阪に帰るか、まだ前に進むか……」

戻る……？ なぜかこのまま戻ると、夢の事も、操緒の事も全部  
分からないままで終わってしまうような気がする……  
だからといって進む……？

たかが、二択の質問に答えれない……

和葉が心配そうに俺を見ている……

そして、樋口がひらめいた、

「よし なら、ジャンケンで決めようぜ」

は……？ ジャンケン……？ 意味わかんない……

樋口は平然と続ける、

「俺が勝ったら、引き返す。ハルが勝ったら、このまま進む」  
樋口が楽しそうに言う。

そこに和葉が、

「ちよつと樋口 こんな時に何言ってるの……」

だが、樋口は表情一つ変えずに

「こう言う時って言うのはな、個人で決めるより、運に任じた方が  
いいんだぜ」

「運まかせ……」

和葉が呆れたように呟いた。

だが、樋口の言うことには一理ある……

今の俺には、正しい判断が出来るとは思えない……

「よし 分かった」

俺は決心して言った、

和葉はそんな俺に、

「ちよつと ハル、正気」

いや、多分今の俺は正気じゃない……

だが、俺は和葉に、心配するな、という風に微笑みかけた。

「よし ハル、準備はいいな？」

俺は小さくうなずいた。

多分、俺の人生上、こんなに緊張するジャンケン初めてだろう。

俺がジャンケンの前に入る構えになると、

「それじゃあ ジャンケン ポン！」

と言う樋口の叫びと同時に、俺は手を振り下ろした。

樋口・・・ゲー 俺・・・チヨキ

運は俺たちに、引き返せと言った・・・

「それじゃあ 戻るか」

ジャンケンの結果を見た樋口が言った。

そして、俺たちが来た方へ歩き出した。

その時だった、後ろで木がなぎ倒される音がしたのは・・・

俺たちはその音に反応して後ろを振り返ると、有り得ないものを見

た。

「犬・・・」

樋口が呟いた・・・

確かに犬にも見える・・・

だが、サイズは絶対犬じゃありえない、象ぐらいの大きさはある。

そして、足に生えている爪が一本、一本の刀ほどの大きさと、鋭さ

はある。

グルルルルルツ、と俺たちを殺しそう目でいかくしている。

「なあ樋口、あれ誰のペットだ・・・？」

俺は引きつった顔で訊いた、

そして、樋口も引きつった顔で答えた

「いやあ あれは、ペットじゃないだろ 首輪がない・・・」

「ねえ そんな事より逃げた方がいいんじゃない？」

和葉が言った。

俺と樋口は、黙ってうなずいた。

そして、俺たちは一斉に化け物、に背を向けて走り出した。

人間、命が危ういとこれまでない以上の運動神経を発揮すると聞いたことがあった。

だが、これまでにこんなに死にそう思いをした事がなかったので、信じてはいなかったが、今その実力が発揮されている。

確かに、いつもよりは速く走れているような気がする・・・

だが、化け物も犬に似ているだけあって、走り出すと速かった。

犬との距離は約15mほどだが、すぐに追いつかれそうだ・・・

「お、おい あ、あ、あんなの反則だろ・・・！」

樋口が叫んだ。

そして、犬が俺たち目掛けて大きな爪を横に振った。

だが、まだ犬との距離がある、俺たちには届かない、と思った瞬間だった。

俺たちの後ろの地面が、いきなりえぐれた。

俺たちはその衝撃で前に2mほど跳んだ。

「ぐはあ！」

「だは！」

と、俺と樋口が唸った。

さつき、えぐられた地面の方を見ると、そこには地面ではなく壁があった。

犬モドキの化け物は、この壁の向こう側だろう・・・

「あ、ぶなかつた・・・」

樋口が潤んだ目で言った。

本当に危なかった。

だが、俺はあることに気づいた。

「かずは・・・」

そう和葉の姿が見当たらない・・・

そして、樋口もその事に気がついた。

「おい ハル、マズいぞ」

ああ、これはシャレとか、笑い話にもならないんぞ・・・

和葉は、この壁の向こうだ・・・

「ハル どうする？」

どうするって言われても・・・

「ま、まず、誰かにこの事説明しないと・・・」

そう、俺たちだけじゃ何も出来ない・・・

樋口はうなずいて、俺たちはこの場所を後にした。

## 必要な力

「大人をからかうのもいい加減にしろ！」  
と俺たちは怒鳴られた。

「マジなんですって」

樋口が言った。だが、そんな事を無視してさっさと行ってしまった。  
・  
・

「チクシヨー 何で誰も信じないんだよ！」

と樋口が言つて、近くの壁を殴りつけた・・・

警察に言つても相手にされず。近くにいる大人に言つても、馬鹿にされるだけだ・・・

この時ほど、俺たちの無力さを痛感したのは初めてだった・・・

俺はこの時、霧の中で見た夢を思い出した。

あの時、あそこで俺を見下ろしていた、あの男はいきなり剣を出して俺に何かをした・・・

「あの力が使えればな・・・」

俺は思わず呟いた。

それを聞いた樋口が、

「あの力つて？」

その質問には素直に答えた、

「霧の中で見てた夢で、誰かがどっからか剣出しておれに何かしてたんだよ。それが、使えたらどうにかなるかもなっておもつてな」

「だけど、そんなのどうするんだよ？」

当然の疑問だ・・・ だが、俺には少し心当たりがあった、

「墓だ・・・」

と俺が答えた。

「墓だあ・・・？」

樋口がもつと意味が分からなさそうな顔をする。

俺が説明を加える、

「あの時、俺たちが墓に行こうとした時には霧が出てきた。でも、俺たちが戻ろうとした時は霧なんて出なかっただろ……」

「それがどうした？」

「まるで、俺たちを墓に近づけないようにしてるみたいじゃないか……？」

今の俺の一言で樋口が少し驚いた顔になる。

「だったら、墓は……？」

「多分ある。そして、そこには何かがあるはずだ……」  
確信はない……だが今はそれに頼るしかない……

「でも ハル、そこに行くには……」

「ああ、あの化けもんに近付いて行く事になるな……」

樋口の顔がけわしくなる。

そんな、樋口に俺が訊いた、

「樋口、俺は行く お前は どうする？」

『俺は行く』と言った瞬間、汗が吹き出た。

本当は行きたくなてない。これが俺の本心だ。

だが、和葉はおれのわがままに付き合っであんな事になってるんだ……

このまま、和葉を見捨てたら俺は最悪の、クズだ！

だけど、樋口は違う……

樋口も俺のわがままに付き合ってくれた側だ。

これ以上、迷惑はかけたくはない……

でも、俺一人じゃ和葉を助けるどころか、途中で心が折れそうだ。

だが、二人だったら少しだが、和葉を助ける可能性が上がる……  
1%でも、和葉を助けられる可能性が上がれば、心が折れる事もなくなるかもしれない……

これも、俺のわがままに違いはない。

それは樋口も分かっている。

それに、墓には何もなければかもしれない……

それを全部ひっくるめて、樋口は答えた。

「行かない・・・」

俺は一瞬焦った・・・

「訳ないだろ！」

樋口は確信を込めた笑みで答えた。

必要な力（後書き）

いよいよ『サビ』の部分です。  
皆さん、ぜひ見てください。

## 赤い意思

やっぱりな・・・

俺たちは霧の中にいた・・・

俺たちは、さっき来た方向とは逆の方向から和葉に近づこうとしていた。

その途中に墓があるはずだ、と思いながら走っていると、さっきと同じ霧に包まれた。

だがこれは、まだ想定内だ。

俺の勘では、墓はこの霧に包まれていないと見つける事が出来ないような気がしていた。

「おい ハル、お前、今はまだ何ともないか？」

樋口が少し心配げに訊いてくる。

「ああ、今の所はな・・・」

さっきは、ここら辺で変な夢を見たが、今はそんなことはない。

だが、樋口には、俺がもしうなされ始めても、そのまましておいてくれと言っている。

和葉を助けるヒントを得ることが出来るかもしれないからだ。

とその時だった。目の前に影が一つ見えた・・・

「おい 樋口、あれ」

と言って樋口の方を見ると、そこには誰もいない・・・

・・・なるほど、ここはもう夢の中って事だな。

俺は迷うことなく、その影に向かった。

やはり、影の正体は墓だった・・・

夢で見たのと同じものだ。

夢より、ボロボロにはなっているが間違いない・・・

だが、そこには、あると思っていた剣がなかった。

夢では、墓の隣に刺さっていたのだがそんなものはない。

あるのは、墓に供えられていると思われる、赤い石だけだった。

「何も、ないじゃんかよ・・・」

俺は赤い石を手にとって、脱力しそうだった。

「こんなので、いったい何も・・・」

出来ないじゃねえか！、と叫ぼうとした時だった・・・

「それが、出来るんだよねえ」

と後ろでよく知っている奴の声があった。

「使い方、教えよっか？」

明るい声で言った

俺はまず、驚いた・・・

「操緒・・・何でここに？」

そう、操緒だった。

俺は改めて訊いた

「何で、こんな所にいるんだよ。」

それに対して、操緒は少し困った顔をして、

「それは操緒のセリフだよ。晴紀は、こんな所来ちゃいけなかった

んだけどね・・・」

と言うことだ・・・

「前に操緒、晴紀にいったよね・・・ これ以上知ったら、人生が

めちゃくちやになるって・・・」

確かに言われた・・・

「だけど それと、これじゃ話は別だろ」

「同じだよ」

えっ・・・

そして操緒は、俺が今握っている赤い石を指さした。

「それが、晴紀の本当のイメージだよ」

俺は耳を疑った。

何でこんな石が、俺の・・・

「でも、今は違うんだろ・・・？」

操緒は首を横に振った、

「それは、違うよ 『今は』じゃなくて『今までは』だよ」

「どついつ、意味だ・・・？」

操緒は、少し間を空けて

「晴紀がそれを、必要としてから、それは晴紀のイメージになったんだよ」

必要とした・・・？ 俺が、これを・・・？

「違う！ 俺が必要としたのは、和葉を助けられる武器だ！ これじゃない！」

だが、この俺の発言に対しては、困ったように笑っただけだった。

そして、操緒の体がどんどん透けてきた・・・

「おい、操緒 ちょっと待てよ」

そして、消えきる直前に

「それを、どう使うかは、晴紀しだいだよ・・・」

いや、使っつて言われても・・・ どうやって使っつんだよ、コレ・・・

あいつ、使い方教えようか？、とか言っつて出てきたくせに、何も教

えてもらっつてないんだけど・・・

その時、後ろの方で足音がした。

「おい ハルー！ どこだー！」

樋口の足音が、

それに対し俺も、

「樋口！ ここだ！」

と返事すると、樋口の姿が見えた。

「おう ハル どこにいたんだ？」

いや、そっちがいなくなっつたんじゃない・・・

そこで、俺はある事に気づいた・・・

何でさっきまで、操緒がいた場所に樋口もいるんだ・・・

あれは、夢だっつたんだよな・・・

そう思い、俺は右手を見た。

やっぱりあつた、赤い石・・・

ヤバイな、現実と夢の区別がつかない・・・

そして、樋口が赤い石の存在に気がついた

「おい ハル、何だ、それ？」

「墓に置いてあった・・・」

樋口がその言葉に驚いた、

「えっ 墓って、見つけたのか墓を？」

「ああ そこに・・・」

と俺は墓を指差した。はずだった・・・

ない さっきまであったはずの、墓が消えていた・・・

「おい 墓なんてないぞ・・・」

「ああ ないな・・・」

ヤバイ、現実と夢の区別がつかない・・・

そんな事していると、いつの間にか霧が晴れていた。

「おい そんな石でどうやって戦うんだよ？」

俺は真面目に答えた

「さあ・・・」

「じゃあ このまま、苑宮を助けに行くのかよ？」

俺は力なくうなずいた・・・

「本当に苑宮を助けられるのかよ・・・」

「大丈夫だ！・・・多分・・・」

そして、俺たちは色々と不安を抱えたまま、和葉の元へと向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7553y/>

---

ガイアの持ち主

2011年11月28日20時49分発行